

SONRISA

そんりさ

vol.175



米国政府+DEA、10月逮捕の「パドリーノ」こと前国防相シエンフェゴスの罪状を11月に取下げ、メキシコへ送還。
どのような裏取引が？ エル・メンチュ、エル・マヨ、それともアルフレディージョ逮捕というクリスマス・プレゼントを期待か？
(RIDNoticias, 2020年12月22日)

『裏切者』が米墨政府の汚職
と麻薬カルテルの内実を暴く

- | | | |
|----|----------------------------------|-------------|
| 02 | 『裏切者』が米墨政府の汚職と
麻薬カルテルの内実を暴く | ……松枝 愛 |
| 06 | メキシコに滞在する中米移民の子どもたち | ……鈴木 萌 |
| 08 | コロンビア・「和平合意」のその後 | ……柴田 大輔 |
| 10 | グアテマラ・アップデート | ……新川志保子 |
| 12 | 回想のラテンアメリカ 番外編 | ……唐澤 秀子 |
| 14 | ペルー音楽 「ア・チャブーカ」で歌われる
チャブーカの魅力 | ……水口 良樹 |
| 16 | ラ米百景 11月25日という日 | ……伊高 浩昭 |
| 17 | メキシコ料理 鶏肉のファルファッススープ | ……ミゲル・アクーニャ |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み | ……小林 致広 |

2021年1月16日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

『裏切り者』が米墨政府の汚職と

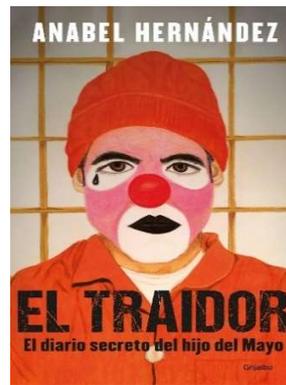
麻薬カルテルの内実を暴く

松枝 愛（翻訳家）

2020年10月に米国当局によって逮捕されたメキシコ前国防相サルバドール・シエンフエゴスの罪状に世界中が唖然としたのは記憶に新しいが、その1年前の2019年10月17日、朝から私はニュースの緊急中継に釘付けになった。メキシコ北西部シナロア州の州都クリアカンで、武装した麻薬カルテルのメンバーが蜂起し、街を封鎖しようとしていた。アンドレス=マヌエル・ロペス=オブレドール政権発足1年目だったこの時、政府のお手並み拝見だとか、麻薬カルテルによる政府への宣戦布告だとか、様々な憶測が流れていた。目出し帽と白Tシャツ姿の武装した男たちが公共バスを停止させ、中にいる乗客が降りて逃げると、バスは大通りを塞ぐ形で停まった。逃げる人々は大声や叫び声をあげるでもなく、粛々と早足でその場を立ち去っていたのが、私には奇異に映った。恐怖を乗り越えて声が出ないのか、それともクリアカンの住民にとってこれは日常なのか。麻薬大国メキシコ的一端を見た衝撃的な数時間だった¹⁾。

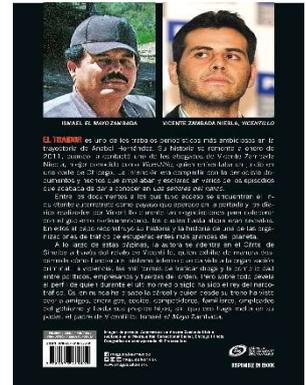
メキシコに暮らしてみると、一般的に言われていることでもやはり奇妙で心に引っ掛かったままといったことがある。たとえば、人々は警察を信用していないというが、たとえ犯罪に遭っても被害を届け出ないほど信用できないのはどうしてなのか。あるいは、汚職の深刻さは誰もが認めるどころだが、大半が諦めムードなのはなぜなのか。

今世紀に入り、メキシコは「民主化」を達成したものの、民主化で法の執行が厳格化する一方で、凶悪犯罪自体は増加していった。その根底に麻薬カルテルなどの犯罪組織間の抗争と警察の腐敗の問題があることに異論は出ないだろう。しかし、問題解決は遅々として進まない。メキシコでは治安改善を最優先に求めている国民の願いに応えられるような国家の健全な運営が一筋縄ではいなくなってしまった。そのメキシコ政治社会の闇の構造を紐解く証言が、構造をこじらせた張本人とも言える麻薬カルテルの中から発出されたともいえる本が、2019年12月に出版された。メキシコ人ジャーナリスト、アナベル・エルナンデスの『裏



裏切り者：マヨの息子の秘密日誌

（表表紙）



左マヨ、右ビセンティージョ

（裏表紙）

切り者『マヨの息子の秘密日誌』（*El Traidor: El diario secreto del hijo del Mayo*, Grijalbo）である。メキシコの麻薬戦争や麻薬カルテルに関する本や研究は多々あるが、本書は初めて麻薬カルテル内部の声、それも全盛期は世界の麻薬の流通量の6割に関係していたと言われるシナロア・カルテル幹部が、国家元首にまで通じる賄賂の流れや、米国麻薬捜査局（DEA）への資金提供について暴露したことが大きな注目を集めた。

著者アナベル・エルナンデスは、世界的に認められた社会派のフリージャーナリストで、メキシコ麻薬問題に関する取材を2005年頃から開始し、本書の前身となった『ナルコの男たち』（*Los señores del narco*）を2010年に上梓していた²⁾。

本書の副題にあるマヨ（Mayo）とは、イスマエル・サンバーダ=ガルシア（1948年～）の通称である。本書では、シナロア・カルテルを牛耳る真のトップ（capo カポ）であったとされる。彼の息子ビセンティージョこと、ビセンテ・サンバーダ=ニエブラ（1975年～）は、2009年にメキシコ市で軍に拘束され、約一年後に米国シカゴに身柄を移送された。その獄中で彼が綴った日誌が弁護士を通じてアナベル・エルナンデスの手元に渡り、その内容が本書によって明るみに出たという経緯だ。

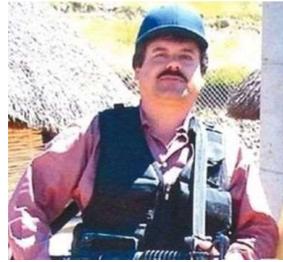
麻薬カルテルのボスの息子という境遇に生まれおちた因縁で、父親のドグマから逃れることができないまま20年以上麻薬ビジネスに関わってき

た息子が、「自由な普通の生活」を願う心の葛藤の末に DEA に情報提供の協力を申し出た決意もさることながら、カルテル内部の権力の推移や麻薬カルテル間及び内部抗争に至る流れ、また父親マヨが麻薬ビジネスで得た資金で畜産業はじめ手広く合法ビジネスを展開し、政府の補助金まで得てこの先何世代にもわたって繁栄しうる一大ファミリービジネス帝国を築き上げていることなどが子細に述べられていて興味深い。

エル・チャポこと、ホアキン・グスマン＝ロエーラ（1958年～）は、過去に2度逮捕されたものの2回脱獄していた【2001年と2016年】。2016年に再逮捕され、身柄を米国に移送され、2019年から米国ニューヨークで裁判を受け終身刑に課せられ現在服役中である。彼がメキシコ麻薬カルテル界の頂点に君臨していたとする通説を覆す権力図が、ビセンティージョによって明らかになった。

チャポが1995年にメキシコで逮捕され懲役20年を言い渡されて服役中だった2001年に脱獄した際、再び麻薬ビジネスで身を立て直すのに手を貸したのがマヨである。それ以来チャポとマヨは腹心の友といった関係にあるという。ビセンティージョはチャポの裁判における証言で、チャポを親しみ込めてコンパドレ（代理父）と呼んでいた。しかしエルナンデスは、チャポに対するビセンティージョの二面性も指摘している。日誌では、チャポについて冷淡で親しみに欠けた、距離をおくような書き方をしているという。

本書でビセンティージョは、制度的革命党（PRI）のエルネスト・セディージョ大統領時代（1994～2000年）に大統領官邸ロス・ピノスを訪れて当時大統領警護隊長だったロベルト・ミランダ＝サンチェスと会食したことを詳細に記している。また、2000年の「民主化」以降の大統領、国民行動党（PAN）のビセンテ・フォックス、フェリペ・カルデロン、PRIのペニャ・ニエトにも言及している。さらにフォックス大統領の妻マルタ・サアグンの息子たち、カルデロン政権期の連邦国家安全相ヘナロ・ガルシア＝ルナ³⁾、連邦警察長官エドガル・ミラン、防衛相ギジェルモ・ガルバン、連邦検事総長エドゥアルド・メディナ＝モラ、それら政府高官やその家族とカルテル・メンバーのつなぎ役として、ダイエット・サプリ会社オムニライフ



チャポ・グスマン

(<https://www.bbc.com/>)



ヘナロ・ガルシア＝ルナと

元大統領フェリペ・カルデロン

(<https://www.elimparcial.com/>)

社の販売員ロドルフォ・ベルトラン＝ブルゴス（通称ドクトール）の名前を挙げたりもしている。ほかにもカルテルに買収された軍人や役人が、時代とともに昇進し、汚職の構造が強化された点も注目される。

汚職の構造

カルテルが役人を買収する方法、賄賂の支払い方法やその額については、本書の「政府のために」の章にビセンティージョが詳述している。

カルテルはそれぞれがプラサ（plaza）と呼ばれる縄張りを持っている。プラサに該当する場所を管轄する警察長官や役人に対しては、肩書きに応じてカルテルから一定の月謝が支払われる。例えば、連邦警察のクリアカン本部長には月5万米ドル、同マサトラン本部長には月3万米ドル、さらにクリアカン、マサトラン、クルスデエロータ管轄の連邦警察署長にそれぞれ月2万ドルといった具合だ。また、シナロア州、ナヤリット州、ハリスコ州、バハカリフォルニア州、チアパス州の連邦警察本部長の任免権者にも月謝が支払われていた。州警察についても同様の仕組みとなっている。

また連邦検察庁（PGR）も地域担当が各地域に配属されていて、縄張りにあたる地域の担当者はすべてカルテルに買収されているという。ビセンティージョは、「PGRに賄賂を受け取らない役人はいない」、「PGRの99%が腐敗している」とまで言い放っている。地方レベルの賄賂は、先述のドクトールや、通称ケタ、コルデロといった人物が当時は仲介していた。

しかし、政府高官レベルとなると、マヨの弟ヘスス＝レイナルド・サンバーダ＝ガルシア（1961年～）、通称レイ（rey：王様）を通じて、直接マヨが金を送った。著者エルナンデスがチャポの裁判

でのレイの証言から示したところによると、フォックス政権時に連邦調査機関 (AFI) の上官だったヘナロ・ガルシア＝ルナには、クリアカン管轄の職員任命に際し、便宜供与を目的にレイ自身が300万米ドルを手渡したと証言した。カルデロン政権の2007年、ガルシア＝ルナは500万米ドルをレイから供与されただけでなく、敵対するカルテルのアルトゥーロ・ベルトラン＝レイバの仲間からも5千万米ドルを受け取ったはずだと述べた。

また、レイによると、シナロア・カルテルは連邦レベルの役人たちの賄賂に月々30万米ドル、政府高官ともなると月々ひとり50万米ドルもの額を渡していたという。買収された役人や政治家は、カルテルのメンバーの結婚式やフィエスタにも顔をだした。賄賂によってライバル組織や警察の機動作戦の情報を受け取ったシナロア・カルテルは、麻薬を難なく流通させることができた。

国営石油会社 (PEMEX) の石油輸送車にはコカイン輸送用の収納庫が設えられ、政府の認可付きの証明書をもった運転手が石油と同時にコカインを輸送したという。PAN政権時代には、政府高官側から石油輸送船にも同じ方法を使わないかと、マヨに話を持ちかけたという。この間、シナロア・カルテルは莫大な利益をあげた。

なぜビセンティージョは身内情報を提供したのか

アナベル・エルナンデスは、著書の出版に至るまでの経緯を次のように語っている。彼女はメキシコの殺人事件に歯止めがかからない背景に何があるのか掘り下げるために取材に取りかかり、2010年に『ナルコの男たち』を出版していた。本の出版後間もなく、シカゴのラジオ番組のインタビューで自身の本について語ると、獄中でたまたまこれを聞いたビセンティージョが、顧問弁護士だったフェルナンド・ガシオラを通じてエルナンデスへ連絡をよこしてきた。

そして弁護士ガシオラと記者エルナンデスは2011年1月に初めて面会する。当初は接触の意図が不透明で、彼女にとって会見は命がけだった。その後、ガシオラが癌に侵され余命幾ばくもないことがわかると、彼らとの関係性が変わっていく。ガシオラは、マヨとビセンティージョの代理人として、本人たちから5年間にわたり、直接話を聞



ベルトラン＝レイバ一族
左: モチョモことアルフレド
右: アルトゥーロ、
2009年12月死亡
(<https://lasillarota.com>)

いていた。そして自ら携わったシナロア・カルテルのメンバーの弁護で見聞きしたことを語るとともに、手元にあった資料を積極的に彼女に提供した。そこには、1990年代からチャポがDEAともコンタクトがあったことや、PAN政権とPRI政権の腐敗、ビセンティージョとDEAとの駆け引きの推移など、驚きの情報が記されていた。2015年にガシオラは癌で死亡する。

弁護団は手渡された資料にある情報を裁判に提出したが、シカゴのビセンティージョの裁判、ニューヨークのチャポ・グスマンの裁判においても、DEAとシナロア・カルテルの癒着に関する証言の採用は、検察側によって頑なに阻止された。米国政府の一大スキャンダルに発展する危険を孕んでいるからだ。裁判で公にされなかった公権力によって不都合な真実をこの本は明らかにしている⁴⁾。

なぜビセンティージョはDEAへ身内の情報提供協力に応じるに至ったのか。これには彼の逮捕前と逮捕後の二つの段階がある。逮捕前の状況について、「ビセンティージョが語る戦争」と題した章で次のような背景が語られている。

2008年1月21日、マヨやチャポのナルコ仲間のアルトゥーロ・ベルトラン＝レイバの最年少の弟アルフレド (1971年～、通称モチョモ) が、マヨの配下にあるクリアカンで陸軍に身柄を拘束された。彼はビセンティージョの4歳年上で、カンクンで暮らしていた頃は仲も良く、チャポの息子とも非常に親しい間柄だった。だが、アルトゥーロは弟の逮捕をマヨとチャポの仕業だとした。前年の2007年に、ベルトラン＝レイバが買収していた連邦検察庁検事 (jefe policiaco) ネメシオ・ルゴがメキシコ市で殺害されたことを機に、両者の間でくすぶっていた火種に弟の逮捕が相まって一気に火がつき、戦争が始まった。ベルトラン＝レイバはセタス (Los Zetas) と組み、カリージョ・フエンテス【ファレス・カルテル】とも同盟を結んだ。

この戦いは、メキシコの麻薬戦争史上で最悪の様相となった。なぜならそれは、腐敗した権力が、連邦から自治体レベルに至るまで、マヨやチャポから買収された勢力か、ベルトラン=レイバあるいはセタスカカリージョ・フェンテスの勢力かで、分断される内紛の始まりを意味したからだ。権力者たちはどっちつかずの同僚を味方に引き込もうと、買収合戦を繰り返した。買収された警察高官は、国民のためではなく、金をよこしたカルテルのために指揮下の部隊を出動させた。

打開策として、連邦警察はシナロア・カルテルのマヨとチャポに協力を依頼した。2人はこれに応じ、敵の情報を提供し賄賂を支払う見返りに、シナロア・カルテルは麻薬ビジネスを滞りなく行うための便宜を受けた。その結果、連邦警察はカルテル関係者多数の逮捕に繋がられた一方で、シナロア・カルテルは力と利益を絶大なものにした。

各カルテルの勢力圏の差こそあれ、2006年末発足のフェリペ・カルデロン政権が「対麻薬戦争」を宣言し、市民を巻き込んだ凄惨な戦いが泥沼化していった時期と、この内紛の時期はまさに重なっている。2008年5月8日には、チャポの息子で当時22歳だったエドガルが、手違いでマヨの雇った殺し屋に殺害された。

そのような混乱の中、ビセンティージョは命を狙われるのが必至であったため、妻と子供とともに太平洋岸の港町マサトランへ身を潜めた。彼はこれまでの人生を変え、米国やカナダで静かに暮らしたいと願った。身の安全が担保されるのであればと、この段階では、身内ではなく敵対カルテルの情報提供に協力するつもりで、DEAに近づいたのだった。ビセンティージョが逮捕されたのは、DEA高官と面会するために2009年3月にメキシコ市へ出かけた時だった。夜間、滞在先で身柄を拘束された。DEAは逮捕劇に関与していなかったと主張した。メキシコ国内での約一年間の拘置所生活でもDEAの職員と接触を持つことになる。

シカゴに移送されたビセンティージョは麻薬取引のかどで裁判にかけられることになったが、量刑を軽減させるためDEAへの身内に関する情報提供を続け、チャポの裁判でも証言台に立った。驚いたことに、情報提供には息子の身を案じた父親マヨも一枚噛んでいたという。



2008-09年のカルテル相互対立 (CDG: カルテル・デ・ゴルフォ)
(<https://blogchinaco.wordpress.com>)

2019年5月、イリノイ州裁判所はビセンティージョに懲役14年の判決を下した。しかしすでに刑務所にいた期間と当局への協力など模範囚たる行いからして、ビセンティージョはすでに釈放された可能性もあるという。

ビセンティージョは自らの自由と引き換えに、仲間の情報を提供した「裏切者」となったわけである。しかし、彼の証言から浮かび上がってくる裏切者とは、彼だけではなく、もっと大きな存在だ。また、権力の底辺から頂点まで、地元から国境を越えてまで及ぶ麻薬カルテルの触手を断つことがいかに困難か、シナロア・カルテルの足跡とビセンティージョの証言、アナベル・エルナンデスの緻密な取材から窺い知ることができる。

最後に、シナロア・カルテルの真のボスであるマヨは、いまだかつて逮捕はおろか、拘束されたことすらなく、今もどこかに身を潜めて暮らしている。

注

- 1) 当事件については、『裏切者』でも説明されている。
- 2) このほかにも、2014年にゲレロ州の農業技術学校の生徒43人が失踪したアヨツィナパ事件の取材も行っている。
- 3) エルナンデスはガルシア=ルナ一派から脅迫を受けていたが、ガルシア=ルナは2019年11月に逮捕された。『裏切者』の出版はほぼ同時期だった。
- 4) 3人の歴代大統領はじめ、メキシコ政府側への賄賂の証言はほかの証言者からでも出て、ビセンティージョの日誌との整合性が確かめられる形となった。しかし当事者たちは当然ながら賄賂の件を否定しており、その後メキシコ国内において身柄を拘束するなどの措置には至っていない。メキシコでは「無処罰」が深刻な問題である。

カフェミン (CAFEMIN: Casa de Acogida Formación y Empoderamiento de la Mujer Migrante y Refugiada) は、メキシコシティにある主に中米諸国からの移民の女性や子どもたちを保護し、食事や宿泊場所を提供したりワークショップやレクリエーションを行ったりする自立支援をしている NGO である。私はメキシコ留学中、2019年11月～2020年7月までのあいだ、カフェミンでボランティア活動を実践していた。そして彼らとの交流は、帰国して数か月が過ぎた現在も続いている。

ボランティア活動のはじまり

カフェミンとの出会いは偶然だった。留学当初通っていた語学学校内の出店で民芸品を売っていた男性に話しかけると、彼はエルサルバドル出身で、私が青年海外協力隊 (現 JICA 海外協力隊) として赴任していたホンジュラスの町 (ナカオメというエルサルバドル国境に近いところに位置) にも何度も行ったことがあるということが分かり、話が盛り上がった。エルサルバドル女性の支援活動をしている (売っていたのもエルサルバドルの民芸品だった) という彼は、私が中米移民について勉強したいと話すと、施設を紹介してくれた。それがカフェミンだった。

ちょうどカフェミンのお祭りが翌週にあるとのことで、他の留学生仲間とともに訪問し、職員に話を聞かせてもらった。その後連絡を取り合い、ボランティアとして受け入れてもらえることとなった。最初は子どもたちを相手に折り紙や綾 (あや) とり遊びを教えたりして、彼らとの距離を縮めていった。

算数教室

子どもたちと交流を深めるにつれ、やはり祖国で十分な教育を受けられていないためか、基礎学力の不十分さが感じられた。ホンジュラスでの協力隊活動時に算数の初等教育に携わっていたこともあり、特に基礎計算力が心配だった。小学校高学年くらいの子に「Moeは何歳？」と訊かれ、わざと「あなたの年齢プラス22だよ」という答え方をするも、指折り数えないとすぐに計算できない子が多かった。

そういう実情を職員に話して、基礎計算力の向上



子どもたちと綾とり遊び

を目的に、12～18歳の子どもたちを対象にして週2回の算数教室を開かせてもらうことになった。

手始めに小学校3年生までの計算問題の小テストを作成して、その時に滞在していた10人くらいに解いてもらった。正答率は、60%程度。足し算引き算も繰り上がり繰り下がりがあると解けなくなったり、九九をほとんど覚えていなかったり、割り算にいたっては壊滅的だったりという現状。個々の苦手分野や習熟度はバラバラであったので、レベル別・単元別に計算プリントを作成して、各自の習熟度に合わせて渡し、個別に巡回指導をしながら採点をする方式で実施することにした。

最初は乗り気でなかった子どもたちも、いざ始めてみると闘争心を燃やし、「ぼくはもう発展レベルに進んだよ!」「今日は全問正解した!」などと、花丸を付けてあげたプリントを持って職員に自慢げに見せに行く子も。一斉授業方式ではなく、一人一人に教え、理解したらたっぷり褒めるというやり方が、どうやら彼らには合っていたようだ。

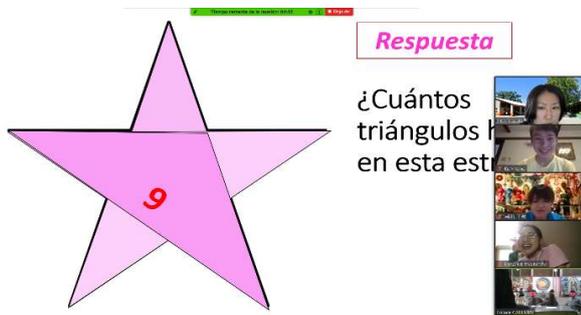


計算問題に取り組む子どもたち

活動停止から、「オンライン教室」へ

他の留学生仲間数人もこの「算数教室」に加わってくれて活動が軌道に乗ってきたと思われた矢先、メキシコにも新型コロナウイルスの感染拡大の波が襲う。3月末にカフェミンでは緊急集会が開かれ、職員の勤務体制の変更、移民たちの生活時間割の改定、そしてボランティア受け入れの一時停止が発表された。せっかく九九を覚え、割り算の筆算(ひっさん)ができるようになった子どもたちに、直接教えることができなくなってしまった。

2か月ほど経ってもメキシコシティの感染状況は改善しないばかりか悪化する一方で、活動再開の目途も立たなかった。そこで職員に相談し、試験的に始めたのが、Zoom を使った「オンライン教室」だ。といっても、カフェミンの子どもたち各個人がパソコンやスマートフォンなどの端末を持っているはずもなく、施設のパソコンを大型テレビに接続して映し出すという方法である。対面で一人一人に教えるのとは違い、テレビの前に並んで座った学力レベルもバラバラの子どもたちを画面に見て、退屈させないような内容を考えねばならない。すでに帰国していた留学生仲間数人には日本から早朝に参加してもらうかたちで、日本の文化や簡単な日本語の紹介、算数クイズなどを40分間、週に1回実践した。



「オンライン教室」の算数クイズ

子どもたちの揺れる気持ち

カフェミンに滞在する中米移民の子どもたちは、ギャングに狙われた等の理由で祖国を去って家族と離れ離れになっているケースも少なくない。中には持参した携帯電話で母親と毎日メッセージを送り合ったり、カフェミンの職員を通して親と連絡を取ったりして、いずれは家族と合流して米国を目指している子もいた。ただでさえそういった不安定な

神状態であるのに、新型コロナウイルスの影響で近い将来の予定も立たず、施設から外出もできなくなり、いくら底抜けに明るいラテンの子どもたちといえども、心理的につらいだろうことは当然だった。

ボランティア受け入れ停止になる少し前のこと。カフェミンに着いて中に入ると、ホンジュラス出身の18歳B少年が壁際でうずくまっていた。どうしたのかと問うと、「ここにいても退屈だ。もうホンジュラスに帰りたい。」という。まじめで穏やかな性格の彼は、いつも算数教室に積極的に参加していた。カフェミンの職業訓練にも真剣に取り組んでいて、カフェミンを出た後は自立して働き、稼いだお金で祖国の家族を呼び寄せる計画のはずだった。しかし、帰国を希望したとしても、3月中旬には中米諸国の国境は続々と閉鎖されていて、すぐには叶わない状況であった。

帰国後も「オンライン教室」は続く

メキシコシティでは7月に活動制限が緩和され、それに伴って一時的に対面でのボランティア活動も再開できた。その後私は帰国したが、帰国後も毎週私たちの「オンライン教室」は続いている。試行錯誤しながら継続してはいるが、教育支援の一つのかたちにするためにクリアすべき課題も多い。

カフェミンは移民たちにとってあくまで一時的なシェルターである。滞在が短期であろうと長期になろうと、いずれは出て行って再び米国を目指すか、メキシコに定住することに決めるか、あるいは祖国へ帰国するのだ。よって、常に移民たちの入れ替わりは激しく、オンライン教室を続けるにつれて対面で会ったことのない子どもが増えてきた。一方で、メキシコ滞在時から気心が知れていた子達がいづの間にかいなくなってしまっていた。そういった濃淡のある関係性も踏まえて、どうやって子どもたちのモチベーションを上げて、目的の焦点をどこに絞っていくか。年齢も学力も様々な彼らに、インフラ環境の制約がある中で、オンラインでどのような教育支援が可能なのか。

いまだ世界的に収束の見通しの立たない新型コロナウイルスの感染拡大。国際協力も、新たな在り方が求められるだろう。せっかく継続しているこの「オンライン教室」を通して、国際協力としての教育支援のかたちを模索し続けたい。

南米コロンビアで、複数の非合法武装組織が活動を活発化させ、組織同士の対立や政府軍との戦闘から住民が犠牲になっている。さらに紛争地を中心に全国で、人権・環境保護を訴える社会活動家が年間300人近く殺害されている。コロンビアでは2016年、同国最大の反政府ゲリラであるコロンビア革命軍(FARC)と政府が和平合意を交わしたが、暴力の犠牲者が増え続けている。



武装解除にのぞむFARC兵士(2017年)

1 旧FARC活動地域で続く紛争の現状

「和平合意」以降も続く暴力は、コロンビア西部の太平洋沿岸地域や、ベネズエラとの国境地帯など北部に集中する。かつてFARCが活動していた地域と重なり、彼らの資金源であったとされる麻薬生産や原料であるコカの栽培地が集中する場所だ。FARCが武装解除したのが2017年。以降、旧FARC活動地域が「権力空白地帯」となり、残された麻薬等の利権をめぐる、左派ゲリラ民族解放軍(ELN)や右派民兵組織、武装解除に応じず分離・再武装した旧FARC系武装集団など、様々な非合法組織が激しく領土を争う事態となった。

最も多くのコカ栽培地が集中するナリーニョ県太平洋岸地方も深刻な人権侵害が続く場所のひとつだ。コカ栽培だけでなく麻薬の生産、国外への密輸ルートが重なる地域に先住民族アワが暮らす。かつてFARCの強い影響下にあったこの一帯は、これまでも武力紛争により多く住民が犠牲になってきた。アワの地域組織CAMAWARIの代表ニベル・モレノに取材すると、現状をこう話した。

「山間の先住民族が暮らす地域はELNが勢力下に置き、隣接する街道沿いの市街地は、他所から来る複数の麻薬組織が勢力を伸ばしている。住民はそれぞれの組織の間に立たされている。この状況に政府は対応できていない」

8月、アワ民族居住地域で住民4人が同時に殺害された。警察に協力したことへのELNの報復だったとされる。9月には違法組織同士の衝突に巻き込まれ住民5人が殺害され40人が拉致された。40人の安否は不明のまま。2020年、少なくとも11人のアワの人々が殺害され、数百人規模の

避難民が発生した。危機的な状況にあるアワは12月、国内外の人道機関へ声明文を発表し支援を要請した。

2 麻薬産業

現在の暴力の要因に麻薬利権がある。利権を争う組織の背後には、最大の消費地・米国と直接つながる国外の麻薬組織の存在も指摘される。コロンビアだけの問題ではないのが現状だ。

この国際的な違法産業の末端に組み込まれるのが、紛争地でコカを作り続ける貧困層の人々だ。ナリーニョ県太平洋沿岸の広い地域でコカを作る人々がいる。アワを含め当地の人々がコカを作り続ける背景にあるのが、貧困を固定化する差別的な社会構造だ。現地で出会った光景がある。一帯は車両が通行できる道のない山岳地帯。腹部の痛みを訴える女性がいた。自力では歩けない。住民は竹に毛布を巻きつけ即席の担架を作り、女性を乗せ徒歩で病院を目指した。地域に医療機関がないためだ。場所によって数時間から2日以上距離を歩くこともあるという。「重篤患者の9割が命を落とす」と地元クリニックの職員は話す。国の関与が極めて希薄な地域では、医療や交通環境だけでなく、電気など生活インフラが欠如する。換金作物を作ろうにも輸送手段が限られ、市場も遠く産業が育たない。さらに教育環境も劣悪で地域に必要な若者を育てることが難しい。

こうした環境にコカが普及した。コカは比較的容易に2〜3ヶ月おきに収穫できる。葉を自宅でペースト状に処理すれば、拳ほどの塊で約10万円

強が手元に残る。平均すれば国の最低賃金程度になる。塊はリュックに入れて持ち運べるので輸送費もかからない。さらに安定した需要と価格が維持されていることも作り続ける要因だ。コカ栽培の普及で初めて安定した生活を手にした人は少なくない。

しかし住民は好んで違法作物を作っていない。2016年の和平合意により、違法作物から合法作物への代替えを政府が支援することが決まった。同時に、コカを作らざるを得ない農村を改善するための開発計画も決められた。しかし、状況は変わっていない。

代替え政策には大きく2つの問題がある。治安と予算だ。旧FARC活動地域を支配する違法武装組織を政府は制御できずにいる。この状況で代替えに舵をきった地域で、コカを作り続けるよう武装組織が住民を脅迫し、地域リーダーが殺害されている。さらに、代替えプロジェクトの予算を政府が確保できていないと全国紙El Espectadorが報じている。

選択肢がなくコカを作り続けなければいけない人々を、さらに政府が攻撃している。コカ栽培地へ政府は治安部隊を投入し、コカの強制除去に乗り出しているのだ。これに抵抗する人々が命を落としている。2018年、抗議する農民7人が治安部隊に殺害され、今年4月にもコカ農家の男性ひとりが狙撃され死亡した。

代替え政策との両輪であるはずの違法作物に頼らない地域づくりを目指す「農村開発」では、腐敗が問題視される。コロンビアのシンクタンク「和平和解研究財団(PARES)」によると、当事者である地域住民がプロジェクトの計画・運営から外され、行政と関連団体に委ねられている。また住民が関与できないところで不透明な予算運用がなされていることが告発されている。国の関与が希薄な地域で暴力の犠牲になってきた人々が、今も阻害され続けている。

3 暴力の構造に組み込まれる人々

周縁化された人々は、暴力の犠牲になるだけでなく「加害」側にも加担する環境にある。

以前、コカ栽培地を訪ねた際、FARCへ入隊する若者の多さに気付いた。彼らに話を聞くと、



殺害された社会活動家の名前が並ぶ
全国紙El Espectador (2020年)

「将来の選択肢がない」「人生を変えたかった」など、閉塞感のある社会に生きる若者の気持ちを聞き、その思い

を兵士募集に利用するゲリラの姿があった。だが、こうした若者の受け皿は非合法組織だけではない。政府軍も同様だ。政府軍兵士の内訳を見ると、実に80%が農村出身者で占められている。仕事がなく、教育の機会が限定される社会では、軍隊も貴重な社会参加の機会となっているのだ。

コロンビアで続く暴力とは、違法産業に頼らなければならない社会に属する人々が、合法・非合法の武装組織に吸収され、都市部から隔絶された土地で殺し合っているのだった。

4 暴力の先にあるもの

ナリーニョ県で人権擁護活動するドラ・バルガスさんは、「暴力は、武装組織が地域をコントロールするのが目的」と言い、こう続ける。

「武装組織は資金源を確保するため、麻薬密輸ルートや生産地を支配する必要がある。彼らにとって住民の権利を主張するリーダーたちは邪魔な存在です。住民の声を代弁できるリーダーをひとり殺害することで、小さな社会で生きる人々から希望を奪い、恐怖による沈黙を強いるのです」

だが、暴力に屈しない人々が声を上げる。2020年6月、コロンビアの全国紙El Espectadorは紙面4面にわたり、「和平合意」以降に殺された社会活動家442人の名前で埋め尽くした。「私たちは彼らを忘れない」と題されたその紙面は、「もう沈黙しない」というハッシュタグとともにSNSで拡散され、沈黙を強いる者への強い態度を表した。

民間調査団体の統計では2016年に21人だった全国で暗殺された社会活動家は、2017年207人、2018年298人、2019年279人と300人に迫り、2020年は284人が犠牲となった。また国連は、2020年コロンビア国内で、21,700人が暴力により避難民となったと報告した。コロナ禍により行動が制限される中でも暴力は続いている。

コロナ禍で加速した政情不安

グアテマラは2020年1月から新政権（アレハンドロ・ジャマティ大統領）が発足した。新型コロナウイルスの感染が中米にも迫っていた3月上旬、国内感染者がまだ確認されていない段階で、新政府は国境封鎖を行い、非常事態宣言を出し、夜間外出禁止、県外への移動禁止などを打ち出した。外出時のマスクの着用も義務化され、違反者には罰則が課せられることとなった。これらの措置は当初はそれなりに評価されていた。だが、感染拡大は止まらず、また補償も不十分な上に、行政の腐敗や非効率などで必要とする人々には届かず、人々の不満は募っていった。

コロナ禍は、グアテマラの社会基盤、セーフティネットの脆弱さをあらためてあぶりだすことになった。農村部では近隣の町に働きに行くことができなくなって人々は現金収入の道が閉ざされ、都市部ではインフォーマルセクターで働く多くの人々が困窮した。子どもの慢性栄養不良は世界でも最悪の部類に入るほどだが、大統領はラテンアメリカでもトップクラスの給料を取っている。9月には大統領自らも新型コロナウイルスに感染する事態となった。

これに追い打ちをかけるように、10月から11月にかけて二つの巨大ハリケーンが地域を襲った。これによる水害で家屋の倒壊、収穫の水没、交通網が破壊されるなどの大きな被害が出た。しかし、政府は被災者を救済するための有効な措置を取っていない。

議会の腐敗も相変わらずで、11月には2021年度の予算を審議なしで強行採決した。この新予算は、栄養改善事業費を消滅させ、教育・保健費を削る一方で、よく横領の手段となる地方事業費や議会関係の予算は増やすという内容だった。これは国民の怒りを買って、11月21日には大規模な反対デモが起こった。首都だけでなく地方都市でも大統領・議員・内務省大臣・警察トップ・検事総長などの辞任、汚職の解決を要求するデモが続いた。デモは警察により暴力的に鎮圧されたが、この市民の圧力で議会は増やした予算の減額を余儀なくされた。

新型コロナウイルスは、レコムが支援してい



ハリケーンによる水害 (Prensa Libre 紙)

る三つのプロジェクトにも大きな影響があった。以下にその状況を簡単に報告したい。

ADISA(ソロラ県サンティアゴ・アティトラン)

障害者のための団体ADISAは、障害を持った人々が必要なケアを受け、社会の中で生活できる(インクルーシブ)ための活動をしている。レコムはADISAの活動のうち0歳から6歳までの乳幼児を対象にしたセラピーを2015年より支援している。

サンティアゴは感染者数が多かったため、最も危険な「赤信号」に指定された。そのために、グループセラピーや家庭を訪問しての個人セラピーをすることができなくなった。そこで電話での確認や相談、各家庭でできることを知ってもらう、などの活動に切り替えた。医薬品を必要とする子どもの家庭にはそれを届け、また感染を防止するための啓発ビデオなどを制作して、多くの人に見てもらうようにした。

サンティアゴは観光地で、多くの住民が観光関連の仕事で生計をたてている。しかしコロナで観光客が途絶え、たちまち生活がたちいかなかった。ADISAに参加している子どもの家族も同様に困窮し、ADISAはこれらの家族のために、食料支援を行うことを決め、トウモロコシや豆、米などの基本食料を配ることにした。だが、それも数ヶ月で資金が底をついてしまう事態となる。ADISAの窮状を知って、レコムは支援のためにキャンペーンを行うことにした。

そして7月から9月までの期間で85万円を集め、現地に送金することができた。支援金は、障害を持つ子どもたちの家庭(194家族、1,032



食糧支援を受け取った母親
(ADISA 提供)

人)への食料支援に使われた。その後、コロナ状況が「赤」から「オレンジ」になり、規制は緩和された。ADISA は装備や検温、手の消毒の徹底、部屋の殺菌など、必要なコロナ対策をとりながら、少しずつ従来の活動を再開した。現在では、ADISA のオフィスでセラピー

や少人数のミーティングなども行えるようになってきている。訪問できる環境（屋外で、室内が広く、換気が十分できる、など）があれば、家庭を訪問して行うセラピーも再開している。

土曜学級（チマルテナンゴ県ポアキル）

レコムが 9 年前から支援している子どものための給食付き土曜学級は、3 月中旬からクラスが開けなくなった。授業ができなくなったために、教師とアドバイザーが学習ドリルを制作し、子どもたちに配った。しかし、子どもたちに会うこともままならず、それが家庭でどこまで活用されていたかは確認できないままとなった。

また、コロナ禍で村人の生活も逼迫し、食料事情も悪くなったので、土曜学級を運営しているグアダルーペ協同組合は残った予算をこれら子どもたちの家庭への食糧支援とすることとした。トウモロコシやフリホール豆などの基本食料を 3 回に分けて 30 家族に配った。

グアダルーペ共同組合は、コロナが当分の間収束しないであろうことを見越して 2021 年のクラスを行う準備をしている。教育省は通常 1 月に始まる新学期を今年は 1 ヶ月遅らせて 2 月の開始と決めた。土曜学級もそれに合わせて 2 月開始となる予定だ。1 クラス 30 人の子どもを受け入れるが、10 人以上の集まりができない場合に備えて、10 人ずつのグループを三つ作り、1 グループ 2 時間ずつ授業をするというプランも作ってある。クラスでは席と席の間隔を十分に取り、手洗いの徹底やマスク着用を行う予定だ。



土曜学級のお母さんたちに食料を支援
(グアダルーペ協同組合提供)

ハロク・ウの女性たち（イサバル県セプルサルコ）

内戦中の軍による性暴力を告発して裁判を起こし、有罪判決を勝ち取った女性たち（現在はハロク・ウというグループとして活動）が住むセプルサルコ村一帯も、コロナ禍で人々の生活が困窮している。ハロク・ウを支援している女性弁護士団体「世界を変容させる女性たち（MTM）」は現地を訪問できなくなったので、女性たちが住む各コミュニティにコンピューターを一台ずつ送り、それを使ってズームでのビデオ会合を定期的に持つなどして活動を継続している。また、食料支援や医薬品の支援も継続している。

コロナ禍で疲弊していることに加えて、セプルサルコ一帯は上述したハリケーン二つに見舞われた。多くの村が被災し、水害で家や収穫を失った。中で比較的被害の少なかったセプルサルコ村には近隣の人々が避難してきて、学校や市場を仮の避難所として使わなければならなかった。陸路が水没し、しばらくはヘリコプターによる輸送に頼るしかない状態が続き、またコロナのためにいろいろな調整も難しかった。まだ水が引いていない農地もあり、生活の再建には時間がかかりそうだ。

MTM は国際機関などに働きかけて援助をとり、これを女性たちの支援に回している。当面の食料支援に加えて、農具、種や肥料なども支援しようと奔走している。

お知らせ 1

裏表紙の口座報告にもあるように、グアテマラ基金の残高は 8 万円台まで減少した。本記事で紹介したとおり、ADISA、土曜学級、MTM などに支援金を送ったためである。

思い出すままに書いてきましたが、ここらへんでちょっとひと休み。大好きなラテンアメリカの食べ物の思い出について書いてみたいと思います。

日本からロスアンジェルスに着き、そこでしばらくラテンアメリカ関係の本屋を訪ねたり、催し物を見たり、友人に会ったりして、2週間ほどいました。その時メヒコの生活を少し知りたくてメヒコの料理店や土産物屋などの集まっているオリベラ街を訪ねたのです。その時食べたメヒコ料理、具体的に何を食べたかは忘れたのですが、がっかりするほど美味しくなかったのです。これからこんなものを食べることになるのか、と思うと、食いしん坊の私はすっかり暗い気持ち…

それなりに楽しく過ごしたロスアンジェルスを後にメヒコへ向かうバスに乗り、人気のない町を通り抜け、ハイウェイをひたすら走っておよそ2時間、国境へ着きます。バスをおり、出入国手続きをすませ、大きなリュックサックを背負い、メヒコ側のティファナへと入ります。土産物をかごに入れたり、食べ物のバスケットをもったり、7・8歳くらいにしか見えない子どもたちがわーっと寄ってきます。食べ物を入れた大きなザルを頭にのせた女性もいれば、あちこちに屋台のお店も並び、さらにきれいな建物もあり、ビザ不要の北米からの客が安い商品を山ほどかかえて車に向かう姿もあり、先ほどまでの人の気配の感じられない北米側とまるで違う国境沿いの街が開けているのです。

そこでたぶんタコスを食べたのです。ひとつ食べ終わるころには、オリベラ街とはぜんぜん違う！美味しい～～！大げさにではなく、本当に目の前が明るくなり、吹いている風さえ軽やかで気持ちいい。私はメヒコが好きだ!!これがメヒコの第一印象でした。

メヒコ市に着き、宿も決まり、日常の生活がはじまると、知りたいのはなんといってもメヒコの食事です。最初のころは宿に近いソカロの裏通りの小さな安い定食屋の何軒かに通ううちになんとなく親しくなったお店がありました。言葉もまだまだ不自由、料理も見当がつかない身には、日替



サンファン市場内の
定食屋

(<https://www.goodfoodmexico.com> より)

わりメニューの定食屋は便利です。だいたい主食のトルティージャとフリホール、これはもう不動の2品です。それにスープに肉料理、デザートが大きなお皿に全部のっていたり、別に出されたり。唐辛子をトルティージャに入れて、クルッと手で巻くしぐさもそれらしくなると、作り方を知りたくなるもの。

親しくなったのは、若い店主に子どものお手伝い二人くらいのお店でした。メキシコ料理がとても美味しいから作り方を教えてほしいという、「いいとも」のふたつ返事ですぐ調理場へ、といっても水道一つにガス台が一つ、そんなお店です。

どんなふうに覚えていったのか、あまり確かな記憶ではないのですが、その日に出す料理の調理を手伝ったと思うのです。トルティージャは出来上がったものを近所の製造所で買ってきました。トルティージャに欠かせないフリホールは、前日から豆(フリホール)を水に浸けておき…、時間がかかりすぎるから、この次ね、と毎度言われて、とうとうこのお店では実技はなしで終わりました。

それからメヒコの食卓に欠かせないのはサルサ。何を入れどうやって作るの?と聞くと、ahorita, ahorita (アオリータ、アオリータ)という返事、すぐさま ahorita とノート。玉ねぎとトマトとチレ(唐辛子)とシラントロ(コリアンダー、パクチー、香草と同じ)を入れてミキサーでガーとまわし、塩と青いリモンの汁を垂らす。ついでトマトと玉ねぎ、にんにくをやっぱりミキサーでガーと回す。これは何?どうするの?と尋ねるとやっぱり ahorita, ahorita、ノートには魔法のようなこの言葉がやたらと並ぶようになりました。

お分かりですよ。何日もたつと、さすがに名前を言っているのではないことが分かってきたのですが、なんだか **ahorita** という言葉にすっかりなじんでしまい、「トマト、玉ねぎ、にんにく」を使うと、条件反射的に思い浮かべるようになってしまいました。

この **ahorita** はもう万能調味料ともいうべきで、メヒコのスープと言ったらその名もソパ・ア・ラ・メヒカーナは、細いパスタを油であげたものに、この **ahorita** をジャッと注ぎ、さっと煮こめば出来上がり。サルサをかけて食べれば最高に美味しい。カリフラワーを柔らかくゆで、卵白を泡立てた衣をたっぷりつけて油で揚げ、この **ahorita** で煮込むのも美味しいお惣菜です。そのバリエーションは数えきれないくらいです。

のちに日本に帰って何年もたってこのノートを見た時、「いまね」、とか「うん」くらいのあまり深い意味はないこの言葉を書きとっていたあの時の情景がくつきりと蘇り、薄暗い台所のちょっと湿ったにおいまで漂ってくるようです。のちにサルサもトマトもミキサーでガーより包丁で切った方がずっとずっと美味しいことも教わったのですが、どちらにしても、メヒコ料理の基本のひとつとして、いまも私の食卓にはひんぱんに出てきます。

トルティージャもマイス（完熟トウモロコシ）の粉を練って延ばしたのですが、同じ材料から作るソペも大好きです。よく路上で七輪に火をおこし、鉄板をのせて焼いているのを食べたものです。草鞋くらいの大きさに伸ばし、ふちを少し高くした中にフリホールを入れて焼いたものです。このマイスとフリホール、そして唐辛子の組み合わせは私の中では最強のトリオです。もちろん、サルサもたっぷり添えて、です。

こんな料理実習をしながら1か月以上がたったある日、突然私はそれまで好きではなかったシラントロがおいしい！これがなくては料理がさえないと、急に変わったのです。本当にメヒコになじんできたのかもしれませんが。

メヒコの料理になれるにつれ、材料をどのように仕入れるか、これも楽しいことでした。メヒコでは至る所に公設市場があり、なかでも最大のひとつがメルカード・メルセです。私たちの宿から歩いて2・30分ほどのところにありました。メル



メルセ市場に並ぶ乾燥トウガラシ
(<https://masdemx.com> より)

カードへの道筋にはずらりと専門の卸売店が並んでいます。幅広いの、細長い、赤いの、青いの、小粒のもの、香りの高い

もの、粉に挽いたもの、ありとあらゆる唐辛子が並んだ店、何種類もの色も粒も違うコーヒ豆の店、米も色からしてバリエーションがすごい！1区画全部お米が並んでいたところがありました。メルカードへ到着するまで、あれもこれも目を引き、いちいち尋ねてみたくなるものが並んでいて、まったくワンダーランドです。あまり人がいない時を見計らって尋ねれば、買うはずがないような私にも食べ方や産地やいろいろな説明してくれるのも楽しいことでした。

メルカードの中に入ると、野菜から果物、肉、加工食品、溢れかえるような量と種類に圧倒されました。とりわけ肉類の種類之多さと原型を留めたままの姿での売買は、さすがに卸市場だけのことがあります。鶏などは一羽、しかも羽根もついたままというのが当たり前、羊や子牛などは一頭まま、牛や豚も半身のものが天井からぶら下がっていたりします。きれいに切り分けられた肉、処理された内臓、骨、筋、血にいたるまで、たぶん、何一つ捨てることなく、食べ物として並んでいる様子は圧巻としか言いようがない光景でした。

メルセのような市場は二人の食卓にはちょっと単位が大きすぎるので、普段は方々にある小さな市場をよく利用しました。楽しみの一つは市場のなかや周りには小さな食堂がたくさんあり、並んでいる盛り付けられたお皿や、グツグツ煮えるお料理を見ては、美味しそうなもの、初めてのものを試してみることです。ほおずきのような形のトマテ・ベルデ（緑のトマト）のソースで煮たステーキなんて、なぜか何度作り方を聞いてもうまくできなかつた、くやしい思い出のあるものです。

まだまだたくさん美味しい思い出がありますが、メヒコ到着からまだ日の浅い日々の味の記憶だけで、紙面が尽きてしまいました。またいつか、美味しく楽しいメヒコのお話をしましょう。

「ア・チャブーカ」で歌われるチャブーカの魅力

2016年ちょっとした事件が起った。と言っても、誰かが傷ついたり、殺されたりとかというネガティブなやつでなく、ちょっとほっこりうれしい系の事件だ。それもペルー音楽について！ペルーのムシカ・クリオーヤのアイコンでもあるチャブーカ・グランダの曲をラテン界のスターたちが歌ったコンピレーションアルバムがリリースされたのである。「ア・チャブーカ(チャブーカに捧ぐ)」と題されたアルバムは、驚くべき有名歌手たちが参加しアレンジも秀逸でその年の愛聴盤となった。今回はその「ア・チャブーカ」にまつわるお話を書いてみよう。

チャブーカ・グランダ。シンガーソングライターとしてムシカ・クリオーヤに革新をもたらした女性。下町の歌自慢のおやじたちがパーティで歌う音楽だったこのジャンルが、商業音楽としてプロ化してまもなく、チャブーカは上流階級出身ながらこの音楽に魅せられ、数多くの名曲を残した。彼女の作品は、これまでのムシカ・クリオーヤが持っていた世界観に上流階級から見た下町文化への憧憬と国際的な洗練された音楽感覚を加え、それを彼女持ち前の独特な歌声で歌ってムシカ・クリオーヤを世界的レパートリーの一つへと押し上げた。また、当時新しく再構築されようとしていたアフロペルー音楽をバックアップし、彼女自身もアフロペルー音楽風の曲を作った。

そんなペルー音楽史上唯一無二の彼女の曲を、ラテンアメリカ各国からスター歌手たちが一曲ずつ選び歌った夢の様なコンピレーションが、「ア・チャブーカ」であった。2019年には「ア・チャブーカ・ドス(チャブーカに捧ぐ2)」がリリースされた。プロデューサーは生前のチャブーカと親交のあったスサナ・ロカ・レイとラジオ番組制作者のマベラ・マルティネス。この2枚のコンピレーションでは約24人の歌手が彼女の曲をそれぞれの素晴らしいアレンジで歌い上げた。一作目では、ルベン・ブラーデス(パナマ)、ホアキン・サビーナ/ペドロ・ゲラ/アナ・ベレン/パシオン・ベガ(スペイン)、ホルヘ・ドレクスレル(ウルグアイ)、フアン・カルロス・バグリエット/リディア・バロソ



ア・チャブーカ



ア・チャブーカ・ドス

(アルゼンチン)、ドウルス・ポンテス(ポルトガル)、ケビン・ヨハンセン(USA・アルゼンチン)、イバン・リンス(ブラジル)、そしてハビエル・ラソ(ペルー)が、二作目はアルマンド・マンサネーロ(メキシコ。先日コロナでの訃報が...)、パブロ・ミラネス(キューバ)、イレ(プエルトリコ)、ジジ・ポッシ(ブラジル)、アントニオ・ザンブージョ(ポルトガル)、ロサリオ・フローレス(スペイン)、チャブーコ/カルロス・ビベス(コロンビア)、ソレダー・パストルッティ/サンドラ・ミアノビッチ/ルイス・サリナス(アルゼンチン)、ナンシー・ヴィエイラ(カボベルデ)、そしてフアン・ディエゴ・フローレス/ノバリマ(ペルー)となっている。

個人的にはサルサ歌手のルベン・ブラーデスやヌエバ・トロバの巨人パブロ・ミラネス、90年代フォルクローレを牽引したソレダーほか、ホアキン・サビーナやカルロス・ビベスといったスーパースターに、カジェ 13(トレセ)から独立後、女性の生に注目した作品を発表し続けるイレやポップフラメンコのロサリオ、アフリカ沖のカボベルデの歌手ナンシー・ヴィエイラなどの参加がまさに大興奮であった。個人的に注目していたペルーで活躍しているシンガーソングライター、ハビエル・ラソが参加したことも非常にうれしかった。

チャブーカ・グランダが世界的に知られるようになった背景には、彼女の活動とともに、スペインのマリア・ドローレス・プラデーラやブラジルのカエタノ・ヴェローゾ、アルゼンチンのさまざまなフォルクローレグループなどによるカバーも大きな役割を果たしてきた。こうした広がりの一部のファンだけでなく、ラテンアメリカ、そしてその枠を超えて彼女の音楽が

愛される要因となった。それに応えチャブーカ自身も国境を越えうる名曲を作ってきたことがよく分かる。過去のマリア・ドローレスやカエタノ・ヴェローゾ同様、彼女の曲をカバーする際にはアレンジが非常に聴く際の楽しみともなるが、このアルバムでも各自のバックグラウンドが見事に反映された素晴らしいアレンジとなっている。一曲ごとにオリジナルとは違うチャブーカの曲の魅力と出会えるのがこのアルバムの醍醐味と言える。

そして事件は続く。2020年2月、ペルーに調査で滞在していた私は「ア・チャブーカ」がまさかのライブで行われることを知るのである。ライブで？あの御所たちを世界中から呼ぶのか？とまさに驚愕する事態だったが、半分はペルー人歌手で構成し、残り半分のアルバム参加者を海外から呼ぶ、というコンセプトのようであった。それでも十二分にすごいわけで、せっかくペルーにいるんだから、さっそく見に行くためにチケットゲット♪と思った私は、その金額にのけぞることになった。

来秘したのはスペインのペドロ・ゲラ、アルゼンチンのフアン・カルロス・バグリエットとリディア・バロソ、ソレダー・パストルッティにピアニストのリト・ビターレ。USAでも活動しているケビン・ヨハンセン。コロンビアからチャブーコであった。国内勢は、ハビエル・ラソとノバリマに加え、ジュリー・フレウンとカルミナ・カンナビーノ、ホルヘ・パルド、ラリッサ・サンチェス、レオ・アマジャ、シャンタル、ミラグロス・ゲレーロらが参加した。個人的にはカルピナ・カンナビーノが参加というのが非常にうれしかった(1曲、デュオのみだったのが残念。チャブーカのトリビュートアルバムも出しているのに！)。

会場は国立大劇場。このセレブな大劇場でペルーの上流階級に交じって観劇とはいかず、栈敷席に近い場所からコンサートを見たが、普段調査で訪れている下町で自分たちだけの楽しみのための音楽としてのムシカ・クリオーヤとは対極のショーミュージックとしてもっとも洗練させた形を目の当たりにすることになった。ペルーのライブでは、往々にしてギターの音色などはゲインをあげすぎて意図せず歪んでしまい耳に痛いことも多いのだが、このコンサートではいかに自然に統制されたバランス



ライブのカーテンコール

で音楽を聴かせるかという意識が隅々まで行き渡っていたことが、当然ではありながら改めて階層の違いを感じさせて新鮮だった。

また、ライブの要所所で寸劇を入れチャブーカの人生や人となり、周りの人々の記憶などを描き出すというニクイ演出がされていたが、その台本は日系ペルー人作家のフェルナンド・イワサキが担当していた。冒頭、子どもが出てきて、チャブーカに捧げられた数々の曲の中で私が一番好きな曲である「チャブーカ・リメーニャ」をアカペラで歌うところから始まる(もう大興奮でした)。そしてCDプロデューサーのスサナ・ロカとも旧知のジュリー・フレウンが冒頭の「エル・ドゥエニョ・アウセンテ(不在の主人)」を歌い上げる。CD参加のミュージシャンは基本的に録音した楽曲を歌い、それ以外にもう1曲演奏する、というパターンが多く見られ、CD不参加の歌手はCDのその他の曲を歌うことが多かったが、それでも数曲CD未収録曲が入っており、その中には「歌われるための静寂(シャツ)」というような、ほとんど知られていないけれども非常に印象的な曲も含まれており、まだまだ私も知らないチャブーカの曲に出会える喜びを改めて感じた。全22曲の熱唱の最後に、チャブーカ自身の歌う「ラ・フロール・デ・ラ・カネーラ(ニッケの花)」のビデオで幕を下ろすというニクイ演出は、彼女自身が歌う自作曲の魅力に改めて没入させる効果があり、最後を彼女の声の余韻で満たされた空間終える幸せを改めて実感した。

このコンサート、今はYouTubeで全編無料公開されているので、興味のある方はA Chabuca en Vivoで一度検索してみて欲しい。もし気に入ればぜひ先立つ2枚のCDもゲットして下さいませ。愛聴盤になること間違いなしです。もちろん、オリジナルのチャブーカを聴いたことないなあと言う方は、チャブーカ自身から聴き始めるというのも、もっとも正しいチャブーカ道への入り方と言えるでしょう。彼女の声の美しさは、まったく別次元ですのでこれまたおすすめです。なんだか最後は押し売りみたいな心持ちになって参りましたが、ぜひ、珠玉の曲との良き出会いとならんことを！

11月25日という日

2020年11月25日、世界サッカー界の英雄ディエゴ・マラドーナが60歳で人生の幕を閉じた。1982年4~6月のマルビーナス（フォークランド）戦争時、私は亜国（アルゼンチン）側で戦争の状況と推移を取材したが、ブエノスアイレスでは敗戦濃厚な対英戦争とスペインで6~7月開かれることになっていたサッカーW杯本大会への希望とが話題を二分していた。

国技サッカーがいつも以上に国民の希望になっていたのは、軍政が無謀にも突入した戦争への反対と厭戦気分を強く物語っていた。亜国が強敵ペルーを買収したことなどで優勝できた78年の亜国大会に出場できなかった若きマラドーナに、今や期待が集まっていた。新聞のスポーツ面を読むかぎり、戦争など「どこ吹く風」だった。

スペイン大会は亜国降伏による戦争終結の少し前に始まった。当時ヨハネスブルク駐在の私は、3ヶ月近い亜国出張を亜国敗戦の報道をもって終え、南アフリカに戻るやすぐに大会取材のためバルセロナに飛んだ。70年のメキシコ大会以来12年ぶりのW杯本大会取材だった。マラドーナが活躍し亜国は2次リーグに進出したが決勝トーナメントに進めず敗退した。

しかし86年メキシコ大会は、マラドーナの活躍で亜国が優勝した。マラドーナが「神話」となったのはこの大会によってである。私は当時リオデジャネイロに駐在していたが、開催国は当初コロンビアだった。南米域内であり、私は3度目のW杯取材に備えていたが、コロンビアが内政問題を理由に開催権を返上し、メキシコ開催となった。そんなわけで、私はマラドーナの「神の手」を目撃できなかった。

マラドーナは86年大会の活躍で「ラ米最優秀競技選手賞」を87年ハバナで受賞した。そのとき初めて会ったキューバ革命の最高指導者フィデル・カストロと親交を結ぶことになる。以来マラドーナは「左翼」を自認。右腕に亜国人同胞チェ・ゲバラの肖像、左脚ふくらはぎにフィデルの肖像を入れ墨にした。コカイン常習者となったマラドーナは治療のためキューバへ通うようになり、フィデルとの交流は深

まる。フィデルは2016年11月25日、90歳で死去した。当時クロアチアに滞在していたマラドーナは号泣し葬儀に間に合うようハバナに飛んだ。その4年後、同じ日にサッカー界の英雄は昇天したのだ。

W杯メキシコ大会のあった1970年11月25日、日本で防衛庁占拠事件が起き、三島由紀夫が割腹・斬首自殺を遂げた。私は東京から電話で状況説明を受け驚愕したものだ。半世紀後の2020年11~12月、東京都北区立中央図書館で「ドナルド・キーンと三島由紀夫」展示会が開かれた。三島が決死行の前に親友キーンに送った書簡が公開され、そこには「私は文士としてでなく武士として死にたい」と書かれている。

11月25日はカタルーニャ人モンセ・ワトキンスの20回目の祥月命日でもあった。モンセは1985年から日本に滞在、スペイン通信社EFE東京支局記者を務めながら日本文学の西語への翻訳と自著執筆に勤しんだ。彼女の90年代半ばからの活躍は鬼気迫るものがあり、多訳多筆の収穫はものすごかった。後で知ったのだが、彼女は94年に乳癌となり自らの寿命と競争しながら書いていた。世紀末の2000年モンセは鎌倉の自宅で惜しまれて他界した。45歳の早世だった。モンセの仕事はスペインとラ米の出版界や読書人に影響を及ぼした。

モンセの後継者的存在のスペイン人エレナ・ガジェゴは、モンセ歿後20周年を記念して活動している。在日4半世紀を超えるエレナも多くの日本文学を西語に訳してきた。モンセの故郷バルセロナでは、作家や出版人がモンセの業績をめぐるシンポジウムを開いた。

11月25日は「対女性暴力一掃のための国際日」でもある。フェミニストを自認するサンフランシスコ在住チリ人作家イサベル・アジェンデ(78)は、従兄弟伯父のサルバドール・アジェンデ智大統領就任50周年の本年11月、フェミニズムを主題にした新著『我が魂の女性たち』を世に出した。自身の男性遍歴、男性によるミソフィニア(女嫌い)と蔑視、フェミニシディオ(女性殺人)などをちりばめながら、理想的ジェンダー均衡社会構築への希望を綴っている。

鶏肉のファルファッレ(ショートパスタ)スープ

Sopa de Lacitos con Pollo

メキシコでは多くの種類のパスタを多彩な料理に仕立てます。

日本ではスパゲティをイタリア料理の店で食べるのが普通ですよね。

メキシコには日本ほど多くのイタリアンのレストランはありません。スパゲティやその他のパスタはふつうのレストランやカフェで食べられます。

今回もとても簡単でおいしい料理です。

数百年前の植民地時代にパスタはメキシコにもたらされました。私が子どものころ、母は、ファルファッレ(蝶ネクタイ形のパスタ)やリガトーニ(麺の表面にすじがある筒形)、マカロニ、フジッリ(らせん状)、ルオーテ(車輪形)など、さまざまなパスタを料理してくれました。

.....

材料 (4人分)

- ・ファルファッレ 1カップ
- ・骨付きの鶏肉(手羽元や手羽中) 300グラム
- ・ピーマン 2個
- ・タマネギ 中1/2個
- ・トマト 大2個
- ・白胡椒 適量
- ・塩 適量
- ・クミンパウダー 適量
- ・水 2リットル



今回は蝶ネクタイ(lacito)型のファルファッレ(スペイン語ではlacito)を使います。

.....

作り方

- (1) ピーマンの種を取りのぞく
- (2) トマトをみじん切りに。
ピーマンは1センチ角に切る。
- (3) タマネギの皮をむいて、みじん切りにする。
- (4) 鍋で湯を沸かし、鶏肉を入れて、ふたをする。
- (5) 約10分後、トマトとタマネギ、ピーマン、白胡椒、クミン、塩を加え、最後にパスタを入れる。
- (6) ふたをして、パスタがやわらかくなるまで煮込んだらできあがり。フランスパンと一緒にどうぞ。

お知らせ 2

ボイス・ベンローズ著『大航海時代 旅と発見の二世紀』(荒尾克己訳、筑摩書房、1985年刊絶版)が、12月「ちくま学芸文庫」として復刻出版されました(780頁、2,000円)。500年に及んだ欧米による世界支配の始まりを描いた大著です。「ラ米百景」担当の伊高浩昭さんが解説を書いています。

お知らせ 3

伊高浩昭さんは、Youtubeのデモクラシータイムスにある「あなたに知ってほしい ラテンアメリカ～情熱と闇の大陸」という講座で、11月から月1回のペースで様々なテーマについて45分ほど語っています。

11月は概論、12月は亡命の文化でした。

(1) 首都在住の先住民、全国先住民族庁占拠

「先住民族の抵抗の日」とされる 10 月 12 日、メキシコ市のコヨアカン地区の全国先住民族庁 (INPI) 事務所は、首都に居住する先住民グループ (80 家族超) に占拠された。占拠グループは、チアパス州のサパティスタ共同体への迫害の停止要求、ならびに市内の移住先住民の劣悪な居住環境の問題を無視してきた当局を告発した。グループの大半は 1985 年のメキシコ地震後、ケタロ州サンティアゴ・メスキティトランから移住した先住民オトミだった。

2017 年 9 月の地震で、彼らが居住していた歴史地区コロニア・フアレスの建物は水道・ガスが壊れ居住不能となった。またコロニア・ローマの 2 か所は、商業モールとして再開発を目論む不動産業者から強制排除の圧力を受けていた。一方、空港に近いコロニア・パンティトランのイグナシオ・サラゴサに居住する先住民マサワも同じ圧力に曝されていた。占拠グループは尊厳ある住居の保障だけでなく、観光振興目的の出身地サンティアゴの中心広場の改修計画の停止も要求していた。

占拠グループと INPI (2001 年 EZLN 代表と国会演説した先住民ミへのアデルフォ・レヒーノが総裁) やメキシコ市当局との対話は数回開催されたが、11 月 24 日の要望書提出以降、目立った進展はない。12 月 17 日の CIG 代議員フィリベルト・マルガリトらの一時拘束に抗議して、INPI 事務所の文書の一部が焼却される事態も起きた。占拠グループは、モレロス統合計画への反対運動など、全国先住民議会 (CNI) 傘下の組織が各地で展開している開発反対運動への連帯活動も積極的に担っている。



11 月 2 日の INPI との対話 (右端アデルフォ・レヒーノ)



INPI と対話集会での CIG 代議員マリセラ・メヒア

出典: <http://tercervia.mx/> 11 月 5 日

<https://regeneracionradio.org/archivos/10428>

<https://desinformememos.org/> 11 月 20 日

(2) ポリビア大統領選挙の評価

10 月 18 日に行われた大統領選挙で社会主義運動 (MAS) 候補 (得票率 55%) は、市民共同体連合 (CC) 候補 (得票率 28%) に大差をつけ当選した。法治国家とかけ離れた 10 ヶ月間の強権と腐敗にまみれたアニェス暫定政権の後、元財務相ルイス・アルセと元外相ダビッド・チョケウアンカが率いる新政権は多くの課題を抱えて船出することになった。

新型コロナウイルス流行による経済情勢悪化の中で実施された今回の選挙では、右派勢力は「モラレス復帰という悪夢」、MAS 側の「人種差別統治と経済的停滞という不安」を煽るだけだった。中道のカルロス・メサと CC は有効な戦略を提示できず、市民組織と連携できなかった。MAS の勝利は、ダビッド・チョケウアンカを支持した高原や渓谷部の先住民農民社会組織によるところが多いとされる。

新政権と MAS は、従来の政治的振る舞いを大きく変える必要がある。新大統領はモラレスの傀儡ではないが、独自の自治的計画を有していない。モラレス政権の半ば以降、司法、議会、選挙管理委員会、人権擁護機関などの独立性を無視した政権運営が顕著になり、腐敗や免責体制が蔓延していた。また、遺伝子組み換え作物や農畜産物輸出規制緩和、森林伐採やユーカリ植林推進など、「よく生きる (vivir bien)」の理念に基づく「母なる大地の権利」を蔑ろにした開発主義路線が顕著になっていた。

この路線の転換には、外貨減少、通貨切下げ圧力、債務支払い増加などの障害だけでなく、台頭した新興勢力からの圧力もある。新旧の社会組織の自主管理、自治能力を取り戻すとともに、骨抜き状態の「2003 年 10 月行動アジェンダ」に代わる新しい戦略を構築する必要がある。



大統領ルチョと副大統領ダビッド

出典: <https://www.servindi.org> 10 月 19 日

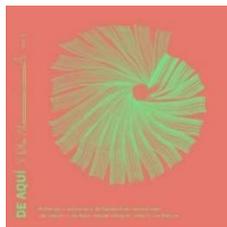
新しい戦略を構築する必要がある。でなければ市民運動の強い抗議が再び起きるだろう。

(3) こちら側から、そして向こう側から

2005 年当時、米国を目指して中米を出発した移住者のうちメキシコ国内で行方不明となった人数は約 7 万人と推測されていた。2005 年、行方不明者の母親たちは不明者の消息を探すキャラバンを始めた。2006 年、約 300 名の行方不明者家族によってメソアメリカ移住者運動 (Movimiento Migrante Mesoamericano, MMM) が組織された。それ以降、毎年 10~12 月にかけて、MMM の支援のもとで、行方不明者を探す中米母親たちのキャラバンがメキシコ国内で行われるようになった。

しかし 2020 年はコロナ禍のため、コアウイラ、サンルイスポトシ、ヌエボレオン、タマウリパス州で、12 月 7 日から 18 日にかけて、バーチャルなキャラバンが実施された。その様子は Facebook を通じて公開された (<https://www.facebook.com/MovimientoMigranteMesoamericano>)。そこでは 36 年振りに再会できたというホンジュラス家族の事例報告などが紹介されている。5 回開催されたというシンポジウム (Zoom 会議形式) も閲覧できる。

表題として挙げた『こちら側から、そして向こう側から (De aquí, y De allá)』は、今年の活動を支援する目的で、12 月 3 日にネット販売されたデジタル・アルバム第 I 巻のタイトルである。賛同者は自分の設定した額を寄付するというシステムとなっている。16 作品のうち 15 編は楽曲 (インストゥルメンタル 2 編) で、最初の曲 Pehuenche の Tu Tierra の中盤に「私はここでも、むこうの人でもない。夢見た人」というフレーズが登場している。私自身は聞いたことのない歌手ばかりだが、どれもしつとりと聞かせる曲調のものである。うち 3 曲はビオレッタ・パラの詩をカバーした作品となっている。最後の一編には、母親あるいは子どもからの手紙 5 編の朗読 (7 分強) が収められている。



第 16 回バーチャルキャラバン予告 アルバム・デザイン

出典: <https://movimientomigrantemesoamericano.org/>
<https://deaquiydealla.bandcamp.com/releases>
<https://desinformemonos.org/> 12 月 8 日

(4) アルゼンチン議会、中絶を合法化

12 月 30 日、アルゼンチン上院 (72 名) は 14 週未満の胎児の中絶合法化案を賛成 38、反対 29、棄権 1、欠席 5 で採択した。従来は、レイプあるいは母体が危険にさらされた場合のみ、中絶は認められていた。2018 年に提出された中絶合法化法案は、下院では賛成多数だったものの、上院では賛成 31、反対 38、棄権 1 で不採択となっていた。2019 年に大統領に就任したアルベルト・フェルナンデスは、中絶合法化法案の採択を公約として掲げていた。

アルゼンチンでは、毎年、32~52 万件の非合法中絶が実施され、2016 年には不適切な手術で 3.9 万人が入院したという。1982 年以降の不適切な中絶による死者は約 3 千人 (年平均 80 人弱) で、2018 年度は 35 人だったという。今回の中絶合法化によって、中絶による死者数は 90% 以上減少と予測されている。

LA 諸国の中絶合法化状況は下表のとおりだが、アルゼンチンでの中絶合法化を強力に推進した運動「緑の波 (marea verde)」が、「Un Violador en tu camino」のキャンペーンを展開してきたチリやメキシコに波及することは間違いない。メキシコ市とオアハカ州で合法化されているメキシコでは、政権党 MORENA は合法化の立場だが、住民協議提案など曖昧な態度に終始する AMLO に対しては「緑の波」側から厳しい批判が浴びせられている。

合法	キューバ、ガイアナ、ウルグアイ、プエルトリコ、アルゼンチン、メキシコ市/オアハカ州、仏領ギアナ
母体危機	グアテマラ、コスタリカ、ベネズエラ、スリナム、エクアドル、ペルー、パラグアイ
一定条件	メキシコ 30 州、ベリーズ、パナマ、コロンビア、ブラジル、チリ、ボリビア
全面禁止	エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、ドミニカ共和国、ハイチ

LA 諸国における中絶の認可のレベル



12 月 29 日の議会前の抗議行動



「緑の波」の LA 諸国への波及を!

出典: <https://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina> 12 月 30 日

<https://www.hrw.org/es/news/> 8 月 31 日

<https://www.elespanol.com/> 2021 年 1 月 2 日

1月10日時点で、LA諸国の新型コロナウイルス感染者は1,641万（←956万）、死者52万（←35万）となっている。3か月前の昨年10月と比べ、50%近くも増加し、パンデミックが収束する気配はまったくない。日本でも、首都圏などに緊急事態宣言が出されたが、感染がピークアウトするのはまだ先のことだろう。前々号（173号）のように、『そんりさ』も、PDFによる配信ということになるかもしれない。本号のいくつかの記事で言及されているように、国内であれ、LA諸国であれ、レコムの活動は、今後も相当期間は、バーチャルなかたちで展開することになる。

編集者：小林致広

次回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2021年4月10日（土）

発送作業は関西で、2021年4月17日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 174 ナルコ回廊再びー北部最前線	Vol. 170 ベネズエラ・カラカスの混沌とした日々
Vol. 173 コロナ禍のラテンアメリカ	Vol. 169 対話による解決を訴えるベネズエラ左派の声
Vol. 172 ナルコ回廊再びー北部最前線	Vol. 168 AML0、新自由主義政策と決別か
Vol. 171 革命から40年を迎えたニカラグアの今	

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会 員：年 8,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆学生会員：年 5,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆賛助会員：年 10,000円（一口） 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆購読会員：年 4,000円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15
 太田方
 TEL 075-862-2556（留守電）
 お問い合わせは、E-mail、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。
 ホームページ： <http://www.jca.apc.org/recom>
 E-mail : recom@jca.apc.org
 Facebook : <https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座：00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコム口座 154万2270円

グアテマラ基金口座 8万6509円

(2021年1月現在)

そんりさ (SONRISA) 175号

2021年1月16日発行

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM)

定価 400円